吾輩はカレーである

登場人物

吾輩（カレー）　中学校の給食に出てくる、ごく普通のカレー。語り手。人間の話を聞くことができる。

ご飯粒　吾輩の相棒。やたらと物知りだが、肝心なところではぐらかす癖がある。

ケンジ　3 年 2 組。食べることが大好きで、思ったことをすぐ口にする。

アカリ　3 年 2 組。物静かだが、時々鋭いことを言う。ケンジとは小学校からの仲良し。

会話の見分け方

「青い文字」　ケンジ、アカリ、先生など、人間どうしの会話。

「茶色の文字」　吾輩（カレー）とご飯粒の会話。人間には聞こえていない。

序章　吾輩はカレーである

吾輩はカレーである。名前はまだない。

もっとも、給食室では「今日のカレー」と呼ばれているらしい。大きな鍋の中で目を覚ましたとき、吾輩はまず、自分がなんとも良い香りをしていることに気がついた。

玉ねぎ。にんじん。じゃがいも。肉。それに、どこか遠い国からやってきたスパイスたち。みんなが力を合わせて、吾輩になったのである。

「今日も人気者だね」

隣から声がした。見ると、白くて小さなご飯粒がこちらを見ている。

「人気者？」

「知らないのかい。カレーの日は、いつも食缶が空っぽになる」

そう言うと、ご飯粒はそれ以上何も話さなかった。

なんだか、ずいぶん物知りそうなやつである。後で分かったことだが、このご飯粒、やたらと物事を知っている割に、肝心なところではぐらかす癖があった。

やがてチャイムが鳴った。給食の時間だ。吾輩は食缶に入れられ、3 年 2 組の教室へ運ばれていく。

教室では、生徒たちが楽しそうに話していた。

「今日はカレーだ！」

そう叫んだのはケンジだった。食べることが大好きで、思ったことをすぐ口にする。

その隣ではアカリが笑っている。物静かだが、時々鋭いことを言う。

ケンジとアカリは、ご近所どうしで小学校から仲良し、中学生になっても、お仲間気分が抜けない二人なのだ。

「でも、毎日カレーだったら困るよ」

「なんで？」

「いろいろ食べた方がいいじゃない」

「俺は毎日でも平気だけどな」

二人はそんな話をしている。

実は、吾輩には不思議な力がある。

人間には聞こえないが、人間の話を聞くことができるのである。

特に給食の時間になると、なぜか中学生の会話が聞こえてくる。ついでに言うと、ご飯粒の軽口も、ずっと聞こえてくる。少々うるさい。

吾輩には不思議だった。

同じカレーを前にしているのに、ケンジとアカリの考え方が、どうも少し違う。片方はとにかく効率と満腹を重んじ、もう片方はバランスと公平を気にする。

この二人の噛み合わないようで噛み合っている会話が、後々ずいぶんな学びの種になるとは、この時の吾輩はまだ知らない。

こうして、吾輩の物語が始まるのである。

第 1 講　吾輩のうしろにひかえし者はだれだ

吾輩はカレーである。

生まれて数日、吾輩はまだ自分のことをよく知らなかった。知っているのは、鍋の中が温かいことと、隣のご飯粒がやたらと物知り顔をしていることくらいである。

「そういえば君、自分が何でできているか知ってるかい」

ご飯粒が聞いてきた。

「知っているとも。玉ねぎ、にんじん、じゃがいも、肉、それにスパイスだ。吾輩は完璧に把握している」

「材料は知ってるんだ。でも、それがどうやって君のところまで来たかは？」

「……鍋の中で勝手に集まった」

「勝手にではないと思うけどね」

吾輩は少しむっとした。自分の出自を疑われるのは気分の良いものではない。

その日の給食の時間、吾輩は 3 年 2 組の教室に運ばれた。ケンジが待ちきれない様子でスプーンを構えている。

「今日はカレーだ!」

「毎回同じこと言ってるよね」とアカリ。

「毎回同じくらい嬉しいんだからいいだろ」

吾輩はそのやりとりを聞きながら、少し誇らしい気分になった。しかしご飯粒が水を差す。

「誇らしいのは結構だけど、君、自分がどこから来たか、まだ調べてないよね」

食べられるまでの残り時間はそう長くない。吾輩は焦った。

「よし、調べよう」

「何を」

「犯人だ」

「犯人？」

「吾輩をこしらえた犯人を突き止める」

ご飯粒は器から吹き出しそうになった。

「犯人じゃなくて、協力者だと思うけどね」

窓の外をトラックが一台通り過ぎた。吾輩はふと、それを目で追った。今まで気にも留めなかった光景である。

「あのトラック、何を運んでいるんだ」

「さあ。牛乳かもしれないし、じゃがいもかもしれない」

「じゃあ、あれも吾輩に関係あるのか」

「あるかもね。ないかもね」

「はっきりしろ」

「はっきりしないのが世の中というものだよ」

吾輩はしばらく黙って考えた。じゃがいもは畑にあった。畑からここまでは歩いてこない。誰かが運んだはずだ。運んだ人は誰かに頼まれたはずだ。頼んだ人はまた別の誰かと話をつけたはずだ。

「なんだか、吾輩の後ろに、ものすごい数の人がいる気がしてきた」

「今頃気づいたのかい」

「馬鹿にするな。カレーは物覚えが早い方ではない」

「それは自分で言うことじゃないと思うけど」

ケンジが牛乳を飲みながらつぶやいた。

「この牛乳ってさ、どこから来るんだろうな」

「牧場でしょ」とアカリ。

「牧場から学校までは？」

「トラックじゃない？」

「誰の」

「運送会社の人の」

吾輩は思わず身を乗り出した（カレーに身を乗り出す機能はないが、気分の話である）。

「聞いたか、ご飯粒。牛乳もトラックで来るらしいぞ」

「君と同じだね」

「吾輩と牛乳が仲間だったとは」

「そういう意味で言ったんじゃないんだけどな」

考えれば考えるほど、吾輩の周りには見えない誰かが増えていく。農家、運転手、整備士、道を作った人、信号を管理する人。誰一人として吾輩に挨拶をしたことはない。それなのに、その全員がいなければ、吾輩はこの皿の上に存在できなかった。

「なんだか、急に自分が偉くなった気がしてきた」

吾輩がそう言うと、ご飯粒は静かに答えた。

「支えられているのと、偉いのとは、たぶん別の話だと思うよ」

「細かいことを言うな」

そのとき、ケンジがスプーンを手に取った。

「いただきます！」

教室に元気な声が響く。

吾輩はふと思った。今この瞬間、自分は一人の力ではなく、名前も知らない大勢の力によってここにいる。誰も手柄を主張しないし、誰もお礼を求めてこない。それなのに、ちゃんと繋がっている。

「不思議な仕組みだな」

吾輩がつぶやくと、ご飯粒はあくびをしながら言った。

「その仕組みには、まだ名前があるんだけど、それはまた今度の話にしよう」

「勿体ぶるな」

「勿体ぶってるんじゃない。眠いだけだ」

こうして吾輩の最初の旅は、思いのほか呑気に幕を閉じたのである。

第２講　吾輩に値段を付けるだって？

「吾輩には値段がない」

ある朝、吾輩はそのことに気がついて、少し落ち込んでいた。

「ないんじゃなくて、書いてないだけだと思うけど」

ご飯粒が言った。

「同じことだ。スーパーのパンには値段がついている。吾輩にはない。つまり吾輩は無価値ということだ」

「極端だな。給食だからタダに見えるだけで、本当は値段があるんじゃないかな」

「では吾輩はいくらだ」

「知らないよ、そんなの」

吾輩は納得がいかず、しばらく皿の上でむくれていた。

その日の昼休み、ケンジが不満げに言った。

「この前、コンビニで新作パン買おうと思ったら、もう売り切れてた」

「人気だったんだね」とアカリ。

「人気なら、もっと作ればいいのに」

「作るのにもお金がかかるんだよ、たぶん」

「じゃあ値段上げればいいじゃん」

「それはそれで、買う人が減るかもよ」

ケンジは首をかしげた。

「難しいな」

吾輩はその会話を聞きながら考えた。人気があるからといって、値段を無限に上げられるわけではないらしい。かといって、人気がなければそもそも値段のつけようがない。

「つまり」吾輩は言った。**「値段というのは、誰かが偉そうに決めているわけではないのか」**

「偉そうに決めている人もいるかもしれないけど、大抵はそうじゃないね」

「では何が決めているんだ」

「欲しいと思う気持ちと、払えるお金。その綱引きだよ」

「綱引き。地味だな」

「地味だけど、世界中でずっと続いている綱引きだよ」

吾輩は少し感心したが、すぐに別の疑問を思いついた。

「では、もし吾輩がスーパーで売られていたら、いくらだ」

「君、鍋から出たら崩れるタイプのカレーだから、売り物にはならないと思うけどね」

「くだらない現実を持ち出すな」

「現実は大抵くだらないものだよ」

ケンジがまた口を開いた。

「そういえばさ、百円あったら何が買えるかって、意外と幅あるよな」

「うん、ジュースも買えるし、お菓子も買えるし」

「でも家は買えない」

「そりゃそうでしょ」

「じゃあ、みんな百円で何を買うか、毎回考えてるってことか」

アカリは少し驚いたように言った。

「言われてみれば、そうかも」

吾輩はその話を聞きながら、自分の中で何かがつながった気がした。値段というのは、単なる数字ではなく、「これを選ぶか、それとも他のものを選ぶか」という無数の判断が積み重なった結果らしい。

「なんだか値段が、急に真面目なものに見えてきた」

吾輩がそう言うと、ご飯粒はにやりとした。

「真面目になったところで、悪いニュースがある」

「なんだ」

「同じようなカレーが、他にもあるということだよ」

「なに？」

「世の中には、君だけじゃないカレーがいっぱいある」

吾輩はしばし絶句した。自分がこの世に唯一のカレーではないという事実は、なかなかの衝撃だった。

「では吾輩は、その他大勢のカレーの一つに過ぎない

というのか」

「その他大勢というか、ライバルがいるということだね」

「ライバル……」

「その話は、また次にしよう」

ご飯粒はそう言うと、それ以上何も語らなかった。

吾輩は窓の外を見た。今日もいつも通りの給食の風景だったが、なんとなく、これまでとは違う目で世界を見ている自分に気がついたのである。

第３講　ライバル揚げパン、なにするものぞ

「ライバルがいる」

先週のご飯粒の一言が、吾輩の頭から離れなかった。

「ライバルとは、具体的に誰なんだ」

朝一番でそう詰め寄る吾輩に、ご飯粒はあくびをした。

「そんなに焦らなくても」

「焦るに決まっている。吾輩の地位が脅かされているのだぞ」

「地位って、給食のカレーに地位なんてあったっけ」

その日、給食の献立表を見ていたケンジが声を上げた。

「今週、揚げパンも出るじゃん」

「人気だもんね」とアカリ。

「カレーの方が人気じゃないのか？」

「どっちも人気だと思うよ」

「甲乙つけられないってことか」

「そういうこと」

吾輩はこの会話を聞き、密かに動揺していた。揚げパン。今まで意識したこともない存在が、急に強大な敵に見えてくる。

「揚げパンとは、いったい何者だ」

ご飯粒に詰め寄ると、答えは呆れたようなものだった。

「ただのパンだよ。揚げてあるだけの」

「ただのパンが人気を二分するとは、由々しき事態だ」

「君、揚げパンに親でも殺されたのか」

「そんな物騒な話はしていない。単に危機感を抱いているだけだ」

昼休み、二人の会話は続いていた。

「もしカレーと揚げパン、どっちかしか給食に出せないってなったらどうする」

アカリの問いに、ケンジはしばらく悩んだ。

「無理だろ、そんなの」

「でも予算には限りがあるんだって、この前先生が言ってたよ」

「じゃあ、どうやって決めてるんだろうな」

「人気投票とか？」

「それはそれで揉めそうだ」

吾輩は聞き耳を立てながら考えた。ライバルがいるということは、単に敵対するということではなく、選ぶ人がいて、その人の気持ちを競い合っているということらしい。

「では吾輩は、揚げパンに勝たねばならないのだな」

「勝つというより、選ばれ続けなきゃいけないってことだね」

「同じことだろう」

「似ているけど、少し違うと思うよ。負けても、そのうち改善すれば選ばれるかもしれないし」

「改善？　カレーが改善するとは、どういうことだ」

「例えば、辛さを変えたり、具を変えたり」

「吾輩の中身を勝手にいじるなと言いたいところだが、悔しいので黙っておく」

そのとき、ケンジが言った。

「でもさ、ライバルがいるっていいことなんじゃない？」

「どうして？」

「だって、負けたくないから、みんな頑張るだろ」

アカリは少し考えた。

「それはそうかも」

「もしライバルがいなかったら、頑張らなくてもよくなるかもな」

吾輩はハッとした。競争というのは、単に勝ち負けの話ではなく、みんなの工夫を引き出す仕掛けでもあるらしい。少しだけ、揚げパンへの敵意が和らいだ。

「なるほど、揚げパンも案外、悪い奴ではないのかもしれない」

「最初から悪い奴じゃないよ、パンだから」

「細かいことを言うな」

ご飯粒は静かに言葉を継いだ。

「でも、競争にはいいことばかりじゃない面もある」

「どういうことだ」

「負ける側の話も、いずれしよう」

吾輩は少し不安になったが、ひとまず今日のところは、揚げパンとの共存を心に決めたのだった。

第４講　なに？道路が有料だって？

その日、給食はいつもより十分遅れて始まった。

「牛乳のトラックが遅れたんだって」とアカリ。

「知ってる。校門の前の道、工事してるだろ。俺も今朝、遠回りさせられた」

ケンジは不満そうにスプーンを回した。

「穴を掘って、埋めて、また新しくして。あれ、けっこうお金かかるよな」

「かかるだろうね」

「誰が払ってるんだ？　パンには値段がついてるけど、道路に値札なんて見たことないぞ」

吾輩は耳をそばだてた。値段の話なら、この前学んだばかりである。値段のないものなど、あるのだろうか（吾輩自身のことは棚に上げておく）。

ケンジは窓の外の工事現場を眺めながら、ふと漏らした。

「道路って、誰のものなんだろうな」

その一言に、吾輩は妙に引っかかった。

「誰のものでもないんじゃない？」とアカリ。

「でも誰かが作ったんだろ」

「まあ、そうだね」

吾輩はご飯粒に尋ねた。

「道路は誰が買ったんだ」

「誰も買ってないよ、たぶん」

「では誰のものだ」

「みんなのもの、と言えばいいのかな」

「みんなの、というのは、誰でもないということと同じではないのか」

「それが、この話のややこしいところなんだよね」

窓の外を見ると、道路がずっと続いている。信号もある。公園もある。誰かがお金を払って買った様子はない。だが、確かにそこにある。

「不思議だな」

吾輩がつぶやくと、ご飯粒が言った。

「じゃあ聞くけど、君はその道路を使うのに、お金を払ったことがあるかい」

「吾輩は歩けないから、道路を使ったことなどない」

「屁理屈を言うな」

「では人間に聞け」

ちょうどそのとき、ケンジが言った。

「そういえば、高速道路はべつだけれど、道路、使うのにお金取られたことないな」

「そうだね」

「じゃあ、みんなタダで使い放題ってことか」

「タダって言っていいのかな……」

アカリは少し考え込んだ。

ご飯粒が静かに口を挟んだ（人間には聞こえないが）。

「もし、道路を使いたいけど、お金は払いたくない、とみんなが思ったらどうなるだろうね」

吾輩は考えた。

「誰も払わなければ、道路は作れなくなるのではないか」

「その通り」

「では、なぜ道路は消えずに存在しているのだ」

ご飯粒は少し得意げに言った。

「それが、みんなで少しずつ負担する仕組みがあるからだよ」

「少しずつ？」

「そう。誰か一人が大金を出すんじゃなくて、みんなで少しずつ」

「けちくさい話だな」

「けちくさいんじゃなくて、公平っていうんだよ」

吾輩は納得したような、していないような顔をした（カレーに顔はないが）。

そのとき、アカリが言った。

「そういえば、うちの町、この前、救急車がもう一台増

えたんだって」

「へえ、誰が買ったんだろう」

「お役所じゃない。救急車を頼む人が増えていると聞いたよ」

「なんで増えてるのかな？ 急病の人がそんなにいるのかな？」

ケンジは複雑そうな顔をした。

「ひょっとすると救急車はタダだから、みんな気軽にたのむからなのかな？」

「それって考えすぎじゃない。でも、たしかにそんな傾向もあるのかもしれないね」

ケンジは続ける。

「救急車って、だれでも使えるものだよね。お役所が買ったとしても、そのお金はみんな（大人たち）が出しているんだろう。俺たち中学生は出していないけど、何かの時には 119 番で救急車を頼むぞ」

「みんなのためのものだから、必要な時にだれでも使えるのは大事なんだよ」

「じゃあ、救急車も道路とおなじなんだ」

吾輩も同じ気持ちだった。

「吾輩が壊れたら、救急車で運んでくれるかな。ひょっとするとお金を払ってないから、有料だったりして」

ふとそう漏らすと、ご飯粒はあっさり答えた。

「毎回、みんなに食べられてるじゃないか。その功績で、タダで乗せてくれるかもね」

窓の外で救急車のサイレンが小さく聞こえた。吾輩はその音を、いつもより少しだけ丁寧に聴いた気がした。

第５講　みんなで出したお金、どう使う？

きっかけは、前の日の給食時間だった。

「救急車が一台増えたって話、しただろ」ケンジが言った。**「なのにさ、三丁目の公園のブランコ、ずっと『使用禁止』の札がかかったままなんだよ」**

「去年からだよね」

「救急車は買えるのに、ブランコは直せないのか？みんなで出したお金なんだろ」

「両方いっぺんには無理なんじゃない？」

「じゃあ、どっちを先にするか、誰が決めてるんだ」

アカリは答えに詰まった。教室で一緒に給食を食べていた先生が、顔を上げた。

「いい疑問だね。明日の授業で、みんなで考えてみようか」

吾輩はご飯粒に囁いた。

「みんなで少しずつ出し合う、というところまでは分かった。しかし、集めた後のことは聞いていないぞ」

「集めるより、使う方が難しいんだよ」

そして次の日。社会科の授業は、いつもと少し様子が違った。

先生が黒板にこう書いたのだ。

『あなたが市長なら、一億円をどう使う？』

教室がざわついた。ケンジが真っ先に反応した。

「一億円！　俺に任せてください！」

「まだ何も聞いてないのに立候補するな」とアカリ。

吾輩とご飯粒は、給食の匂いに紛れて授業をこっそり見学していた（人間には見えないので、正確には「見学」とは言えないのだが）。

先生が続けた。

「道路の修理、公園の整備、図書館、防災、学校、給食。全部にお金を使いたいけど、一億円では足りません」

教室が静かになる。

ケンジが手を挙げた。

「全部ちょっとずつでいいじゃないですか」

「それも一つの考え方ですね」

先生はそう言ったが、あまり満足していなさそうだった。

吾輩はご飯粒に囁いた。

「全部ちょっとずつというのは、良い案ではないのか」

「悪くはないけど、それだと、どれも中途半端になるかもしれないね」

「では、どうすればいいんだ」

「それを考えるのが、市長の仕事なんじゃないかな」

「面倒な仕事だな」

「面倒だから、みんなの意見を聞いて決めるんだよ」

アカリが手を挙げた。

「私は、給食の設備を直すのを優先します」

「理由は？」

「毎日みんなが使うものだからです」

先生はうなずいた。

ケンジが対抗するように言った。

「俺は道路優先です。壊れてたら危ないし」

「それも大事な視点ですね」

二人の意見を聞きながら、吾輩は考えた。どちらも間違っていないのに、選べるのは一つ、あるいは限られた組み合わせだけらしい。

「これは、前にやった値段の話と、少し似ている気がするぞ」

吾輩がつぶやくと、ご飯粒はうなずいた。

「似てるね。限られたものをどう配分するか、という点で」

「では市長も、選ぶ人ということか」

「議会に認めてもらうことが必要なので、勝手には選べないけど、基本そういうこと」

そのとき先生が付け加えた。

「ちなみに、このお金は税金です。みんなが納めたお金です」

教室がまたざわついた。

ケンジが小声で言った。

「じゃあ、俺たちも税金を納めているのかな？」

「違うと思うけど……でも、お菓子を買うときには税金もはいっているかも」

アカリも自信なさげだった。

吾輩はご飯粒に尋ねた。

「税金というのは、前にやった道路の話と関係があるのか」

「あるよ。みんなで出し合うという点では、同じ仕組みだね」

「では吾輩も税金を納めているのか」

「君は食べられる側だから、納めてはいないかな」

「肩身が狭いな」

「肩がないから安心しなさい」

授業の最後、先生が言った。

「正解は一つではありません。でも、選んだ以上、何かを諦めたことにもなります」

教室がしんとした。

ケンジがぼそっと言った。

「難しいこと言うなあ」

「でも、なんとなく分かる気がする」とアカリ。

吾輩は、今日初めて、給食の匂いよりも、教室の空気の方が気になった一日だった。

第 6 講　吾輩を作る人が足りないって？

その朝の給食室は、いつもより慌ただしかった。

「今日は一人お休みだから、急ぐよ」

調理員さんの声が飛ぶ。大きなしゃもじが、いつもより速く鍋をかき回す。吾輩は目が回りそうだった。

「乱暴だな」

「文句を言わない。三人でやる仕事を、今日は二人でやってるんだから」とご飯粒。

見ると、調理員さんの額には汗が光っている。それでも手は止まらない。玉ねぎを刻み、鍋を洗い、また次の鍋に向かう。

吾輩は不思議に思った。暑い。重い。忙しい。それなのに、この人たちは毎朝ここに来て、吾輩をこしらえてくれる。

「人はなぜ働くんだ」

吾輩は、そんなことを考え始めた。

「急にどうしたの」ご飯粒が聞いた。

「農家の人も、運転手も、調理員さんも、みんな働いているおかげで吾輩は存在できる。しかし、なぜ働くのかは知らない」

「深いところに目をつけたね」

「深いだろう。吾輩は深いカレーなのだ」

「具は普通だけどね」

その日の給食時間、ケンジとアカリは来月に控えた職場体験の話をしていた。

「正直、めんどくさいんだよな」ケンジが言う。

「まだ始まってもいないのに」

「だって、働くんだろ？ 勉強の方が楽だ」

アカリは少し考えてから言った。

「うちのお父さん、仕事が好きらしいよ」

「本当に？ 大変そうなのに」

「大変だけど、誰かの役に立つのが嬉しいんだって」

ケンジは黙り込んだ。**「そんな考え方もあるのか」**

吾輩はその話を聞きながら、ご飯粒に尋ねた。

「働く理由は、お金のためではないのか」

「それもあるだろうね」

「それだけではないのか」

「だけじゃないみたいだね」

「では他に何がある」

「それは、人によって違うんじゃないかな」

「曖昧な答えだな」

「曖昧なのが、人間というものだよ」

そのとき、ご飯粒がふと真面目な顔をした。

「でもね、働くことには、もう一つ考えておかなきゃいけないことがある」

「なんだ」

「働く人が、足りなくなってきているらしい」

吾輩は驚いた。

「足りない？ 仕事はたくさんあるのに？」

「そう。仕事はあっても、やる人が見つからないことがある」

「なぜだ」

「子どもの数が減っているからだよ」

「それだけ？」

「それだけじゃない。でも、働く人そのものが少なくなっていることは、大きな理由の一つだね」

吾輩はしばらく黙った。今の中学生が大人になる頃には、働く人はもっと減っているのかもしれない。

アカリが思い出したように言った。

「そういえば、給食の調理員さんも人手不足だって聞いたことある」

ケンジが驚く。**「そうなの？」**

「うん。だから、なかなか人が集まらない仕事もあるんだって」

吾輩は少し不安になった。調理員さんがいなくなったら、

自分は生まれないのだから。

「外国から来て働いている人も増えてるよね」アカリが続けた。

「コンビニとか？」

「うん、近所のスーパーにもいる」

ケンジはうなずいた。

「日本で働く人が減るなら、そういう人たちの力も大事になるのかもな」

「そうだね。でも、外国から来た人たちも、働く人である前に、ここで暮らす人たちなんだよ」

吾輩は考え込んだ。畑、工場、運送会社、コンビニ、給食室。社会はたくさんの働く人によって支えられているらしい。しかし、その人たちにも、休むことも、病気になることもあるだろう。

「働く人が、ずっと元気に働けるとは限らないんだな」

吾輩がぽつりと言うと、ご飯粒はうなずいた。

「そうだね」

「では、そうなったとき、どうするんだ」

ご飯粒は少し笑った。

「それは、また次の話にしよう」

「いつもそう言って引き伸ばすな」

「引き伸ばしてるんじゃなくて、順番を守っているんだよ」

吾輩は釈然としなかったが、ひとまず今日のところは、調理員さんへの感謝を、心の中でこっそり唱えておくことにした（誰にも伝わらないのだが）。

第７講　吾輩は遠くになんか行きたくないぞ

その日、社会科の授業に一枚の新聞記事が登場した。

『市、給食調理のあり方を検討』

教室が少しざわついた。ケンジが小声で言った。

「給食がなくなるのか？」

「違うと思うけど……」とアカリ。

先生が説明を続けた。

「調理室の設備が古くなっています。調理員さんも不足しています。学校ごとの調理を続けるか、給食センターでまとめて作るか、市が検討しているそうです」

吾輩は思わず身を乗り出した（気分の話である）。

「これは、吾輩の存在に関わる重大事だぞ」

「大げさな」とご飯粒。

「大げさではない。給食センター行きになったら、吾輩の運命も変わるかもしれん」

「そんなに変わらないと思うけど」

先生が生徒に問いかけた。

「皆さんなら、どちらを選びますか」

ケンジが手を挙げた。

「給食センターです。古い調理室を学校ごとに全部直すより、大きいのを一つ作った方が安くすむと思います」

「なるほど。ほかに理由は？」

「調理員さんが足りないなら、一か所に集まってもらった方が、少ない人数でたくさん作れます。浮いたお金は、道路とか図書館に回せるし」

アカリも手を挙げた。

「私は学校調理を残したいです。センターから遠い学校は、届くまでに冷めてしまいます。近い学校だけ温かいのは、不公平だと思います」

「でも、センターなら全部の学校が同じ献立だろ。そっちの方が公平じゃないか」とケンジ。

「同じものが届くことと、みんなが同じように食べられることは違うよ。アレルギーのある子は、学校の調理員さんに相談して別のおかずにしてもらってるでしょ。何千人分を一度に作るセンターで、一人ひとりに合わせられるのかな」

ケンジは腕を組んだ。

「それは……考えてなかった。けど、設備が古いまま壊れたら、全員の給食が止まるぞ。それこそ困る人がいちばん多い」

「それも分かる。だから、安くなるのはいいけど、そのぶん誰かだけが我慢することにならないか、確かめたいの」

「俺は、同じお金でいちばんたくさんのことができる方を選びたい」

先生はうなずいた。

どちらにも理由がありますね」

吾輩はご飯粒に尋ねた。

「どちらが正しいんだ」

「正解は、たぶんないと思うよ」

「では、どうやって決めるんだ」

「限られたお金と人手の中で、何を大事にするか、選ぶしかないんじゃないかな」

「またその話か」

「何度も出てくるのには、理由があるんだよ」

アカリがふと言った。

「病気になった人や、お年寄りを支えるのも、お金がいるんだよね」

「そうか、給食だけじゃないんだ」

「そう。病院も、介護も、年金もある」

「全部大事だよな」

「そう。だから簡単じゃないんだと思う」

吾輩は窓の外を見た。道路、公園、学校、病院。どれも当たり前に見えるが、その裏には税金を払う人、働く人、

制度を作る人、たくさんの協力があるらしい。

「吾輩も、誰かを支えているのだろうか」

ふとそう漏らすと、ご飯粒は即答した。

「もちろん」

「誰をだ」

「お腹をぺこぺこにして倒れそうになっている中学生たちを」

「それは支えるというより、食糧になっているだけではないか」

「同じことだよ、この際」

吾輩はしばらく黙って考えた。病気になるかもしれない。怪我をするかもしれない。年を取るかもしれない。それは特別な誰かの話ではなく、みんなに関係のある話らしい。

「なんだか、真面目な気分になってきたな」

吾輩がそう言うと、ご飯粒は少し笑った。

「そのわりに、さっきから食糧の話を引きずってるけどね」

「それとこれとは別だ」

「毎回、都合よく別にするね、君は」

チャイムが鳴り、授業が終わった。ケンジとアカリは何やら考え込みながら席を立った。吾輩は、その日の給食時間がいつもより少しだけ静かに感じられた。

第８講　吾輩は会社を創るぞ！

職場体験が終わった週の給食時間、ケンジは興奮していた。

「俺、パン工場に行ったんだけどさ、すごかったぞ。機械がずらっと並んでて、一時間に何千個も焼けるんだ」

「めんどくさいって言ってたのに」とアカリ。

「それは忘れてくれ。で、聞いて驚くなよ。給食の揚げパン、あの工場で作ってたんだ」

吾輩は耳を疑った。揚げパン。あの宿敵の名である。

「入口に『株式会社』って書いてあってさ。社長さんがいて、工場長さんがいて、パンを焼く人、運ぶ人、売りに行く人。百人くらいいるんだって」

「私が行った商店街のパン屋さんは、ご夫婦二人だけだったよ」アカリが言った。「それでね、来月でお店を閉めるんだって」

「え、なんで」

「駅前に大きなスーパーができて、お客さんが減っちゃったって」

ケンジは黙った。吾輩は別のことで頭がいっぱいだった。

「聞いたか、ご飯粒。揚げパンの後ろには、会社というものがついているらしいぞ」

「そうだね」

「百人だぞ。こちらは鍋一つだ。勝てるわけがない」

「勝ち負けの話だったっけ」

「会社って、何なんだ」

吾輩は真剣な顔でそう尋ねた（顔はないが、真剣さは伝わったらしい）。

「人が集まって、仕事をするところかな」

ご飯粒が答える。

「では学校も会社か」

「違う」

「町内会は」

「違う」

「カレー鍋の会は」

「そんな会は存在しない」

吾輩は少し考えて、閃いた。

「よし。吾輩も会社を作る」

ご飯粒は嫌な予感がした。

「何を売るんだい」

「もちろんカレーだ」

「君自身を？」

「そうだ」

「誰が作るの」

「吾輩」

「誰が運ぶの」

「吾輩」

「誰がお金を出すの」

「吾輩」

ご飯粒はしばし沈黙した後、静かに告げた。

「無理だね」

「なぜだ！」

「一人しかいないからだよ」

吾輩はしょんぼりした。

「では仲間を集めよう」

「誰を」

「じゃがいも、玉ねぎ、にんじん、それにご飯粒」

「なぜ私まで」

「副社長だ」

「勝手に決めるな」

ケンジとアカリも、工場の話を続けていた。

「会社って、一人じゃ無理なんだね」

「大きな工場を作るのも、トラックを買うのも、お金がいるもんな」

アカリがふと言った。

「だから株ってあるんじゃない？　会社に出資してくれる人を集める仕組み」

ケンジは感心した。

「みんなで応援する感じか」

「そんな感じ」

吾輩はハッとした。一人では無理でも、出資してくれる仲間が集まればできる。それは前に習った「協力」の話と、どこか似ている気がした。

「では吾輩株式会社は、大成功間違いなしだな」胸を張る吾輩に、ご飯粒は冷静に言った。

「お客さんに選ばれなければ困るけどね」

「ケンジやアカリにか？」

「たぶん違う。出資してくれる人だ。その人たちが信用してくれなければお金は集まらないよ」

「信用ってなんだ。どうすれば信用されるのか？」

「将来会社が成功するかどうかの期待だよ。それには、事業計画が必要だな」

「まずは何を作るか、決めてないとダメだということか」

「そういうこと」

「もちろん決まっている。カレーだ」

「もう君自身が商品なのに、それ以上何を作るの」

吾輩は答えに詰まった。

結局、吾輩株式会社は、社員一名、副社長一粒（本人は固辞）、事業計画書ゼロ、資本金ゼロ円のまま、設立からわずか数分でひっそりと倒産したのだった。

「早すぎる倒産記録じゃないか」

吾輩がぼやくと、ご飯粒は淡々と言った。

「歴史に残るとしたら、良い意味ではなさそうだね」

「せめて励ませ」

「励ましてどうにかなる段階は、とっくに過ぎている」

吾輩はふと、アカリの話を思い出した。

「商店街のパン屋も、店を閉めると言っていたな。吾輩と同じか」

「同じじゃないよ。君は競争する前に倒れただけ。あのパン屋さんは、何十年もお客さんに選ばれてきて、それでも負けたんだ」

ご飯粒は少し間を置いた。

「前に、負ける側の話もいずれしよう、と言ったね」

「覚えている。不安になったからな」

「競争に負けると、店はなくなる。働いていた人は仕事を失う。あのパンが好きだったお客さんも、歩いて買いに行けたお年寄りも困る」

「ひどい話ではないか。競争はみんなの工夫を引き出す、良い仕掛けだったはずだ」

「良い仕掛けだよ。安くておいしいパンを選べるのは、競争のおかげだからね。でも、選ばれた側の裏には、必ず選ばれなかった側がいる」

「では、負けた者はどうなるんだ」

「別の仕事を探す。新しい店を始める人もいる。パン屋さんの腕は、負けても消えないからね。ただ、次が見つかるまでの間、暮らしを支える仕組みがいる」

吾輩は思い出した。病気、怪我、年を取ること。この前の授業で聞いた話である。

「仕事を失うことも、みんなに関係のある話なのか」

「そう。負けた人を放っておかない仕組みがあるから、人は安心して競争に挑める」

「……揚げパンに負けても、吾輩は放っておかれないだろうか」

「君の場合は、来月の献立表にまた載るから大丈夫だよ」

窓の外では、いつも通りトラックが走っていた。あのトラックも、どこかの会社が動かしているのだろう。吾輩は少し悔しさを感じながら、いつかまともな会社を作ってみせると、心に誓った（三日後には忘れていたのだが）。

第９講　金がなければ何も出来ない

吾輩株式会社は倒産した。社員一名、副社長一粒、資本金ゼロ円。当然の結果である。

「終わったな」

吾輩がつぶやくと、ご飯粒が言った。

「始まってもいなかったけどね」

「ひどい」

「事実だよ」

しかし吾輩はめげなかった。

「では、お金を集めよう」

「どうやって」

「ケンジに出してもらう」

「断られると思う」

「アカリに出してもらう」

「たぶん断られる」

「校長先生に出してもらう」

「もっと断られる」

吾輩はしょんぼりした。

そのとき、ご飯粒が言った。

「世の中には、お金を貸す仕事があるんだよ」

「そんな仕事が」

「銀行だよ」

吾輩は驚いた。聞いたことはあるが、何をしている場所なのか考えたこともなかった。

「銀行はお金持ちなのか」

「そうとも限らない」

「では、どうやって貸すんだ」

「預かったお金を貸しているんだよ」

「預かったお金？　誰の」

「使わないお金を、銀行に預ける人がいる。そのお金を借りたい人もいる。銀行はその橋渡しをしているんだ」

その時、アカリがふと言った。

「そういえば、利子ってあるよね」

「よく分からん」とケンジ。

「私も詳しくは分からない」

ご飯粒が説明した。

「お金を貸すとね、返ってくるまで、そのお金は使えない。だから、そのお礼みたいなものだよ」

「なるほど」

吾輩も少し分かった気がした。

「では吾輩も、銀行から借りればいいのだな」

胸を張る吾輩に、ご飯粒は冷静に尋ねた。

「担保は？」

「担保？」

「借りたお金を返せなかったときの保証だよ」

「吾輩自身を担保にする」

「君、担保になったら最終的に食べられて終わりだと思うけど」

「それは……困るな」

吾輩はしばらく考え込んだ。

「では、何を作るか、まず決めるべきか」

「それが先だと思うよ、ずっと」

「事業計画というやつか」

「その通り」

「今度こそ、絶対に成功するぞ」

吾輩は胸を張ったが、ご飯粒が聞いた。

「何を作るんだい」

吾輩は考えた。考えた。さらに考えた。

「まだ決まっていない」

「それでは誰もお金を投資したり貸したりすることはないな」

吾輩は再びしょんぼりした。

窓の外では夕日が校庭を照らしていた。お金は不思議だ。貯める人がいる。借りる人がいる。それをつなぐ仕組みもある。

「吾輩株式会社は、また失敗したということだな」

「そう」

「でも、今度は一つわかったよ」

「何が？」

「会社を作るには、お金だけじゃなくて、何のために、何をする会社なのかが必要なんだ」

こうして吾輩株式会社は、二度目の資金集めにも失敗したのであった。

第 10 講　吾輩は世界のカレーである

「君の材料は、どこから来るんだい」

ある日、ご飯粒がそう聞いた。

「じゃがいも、玉ねぎ、肉、スパイス」

「そう言われてみると、君は自分のことをあまり知らないね」

「失礼な。吾輩は自分自身をよく理解している」

「では、スパイスはどこから来た」

「……鍋の中」

「それは違うと思う」

カレーが出た日の給食時間、ケンジとアカリがこんな話をしていた。

「カレーって、日本の料理だと思ってた」とケンジ。

「私も」とアカリ。

「でも、カレー料理のルーツはインドなんだよね」

「へえ」

吾輩は思わず声を上げた。

「インドだと？」

ご飯粒がうなずいた。

「スパイスの多くは、海外から来ているんだよ」

「では吾輩は、国際派ということか」

「そういうことになるね」

吾輩は急に誇らしくなった。

アカリがふと言った。

「そういえば最近、円安とか円高とか、ニュースで聞くよね」

「よく分からん」とケンジ。

吾輩も心の中で**「分からん」**とつぶやいた。

ご飯粒が説明した。

「たとえば、一万円でたくさん外国の商品が買えるなら円高。同じ一万円で、あまり買えなくなったら円安」

「なるほど」

ケンジがうなずいた。

「じゃあ、円安だと輸入品は高くなるのか」

「そういうことのようね」

アカリが気づいたように言った。

「ということは、スパイスも高くなるかもしれない」

それを聞いて、吾輩は青ざめた。

「吾輩の値段も上がるのか」

「給食だから、急には変わらないと思うよ」

吾輩は少し安心した。

ご飯粒が続けた。

「でも国際経済は、値段だけの話じゃないんだ」

「他にもあるのか」

「日本が得意なもの、外国が得意なもの、お互いに交換した方がうまくいくことがある」

吾輩は思い出した。最初の頃に習った「協力」の話。一人で全部やるより、得意なことを分担した方がうまくいく。国と国も、少し似ているらしい。

ケンジがふと言った。

「そういえば、コンビニの店員さんで、外国の人を見かけることが増えたよな」

「スーパーにもいる」

「働く人が足りなくなってるって、前にやったよね」

「うん」

吾輩は気づいた。物だけではない。人も、世界とつながっているらしい。

ご飯粒が静かに言った。

「君は給食のカレーだ。でも君の中には、世界が入っているんだよ」

「なんだか誇らしいような、恐れ多いような気分だ」

「その両方でいいと思うよ」

そのとき、ケンジがカレーを一口食べた。

「うまい」

アカリも食べる。

「うん」

吾輩はその様子を見ながら思った。世界は広い。しかし、その広い世界が、この一皿にもつながっている。

「なんだか、少し不思議な気分だ」

吾輩がつぶやくと、ご飯粒は珍しく優しい声で言った。

「不思議に思えたなら、この旅も、まあまあの成果だったんじゃないかな」

「まあまあか」

「上出来、とまでは言わないでおくよ」

「けちだな」

「これでも褒めているんだよ」

こうして吾輩の旅は、いよいよ最後の一皿へと向かっていくのである。

終章　吾輩は少し賢くなったカレーである

吾輩はカレーである。中学校の給食に出てくる、ごく普通のカレーである。

振り返れば、ずいぶん長い旅だった。

農家の人がいた。運ぶ人がいた。調理員さんがいた。値段があった。市場があった。ライバル（揚げパン）がいた。道路も公園も、誰のものでもないのに、みんなのものだった。税金があった。働く人がいた。会社を作って、二度倒産した。銀行に断られた。世界とつながっていた。

「思ったより、いろいろあったな」

吾輩がつぶやくと、ご飯粒が言った。

「その割に、君はあんまり成長していない気がするけど」

「失礼な。吾輩は精神的に大きく成長した」

「株式会社を二回潰した実績はどうするの」

「それはそれ、これはこれだ」

しばらく沈黙が続いた後、ご飯粒が聞いた。

「さて、結局、経済って何だったと思う」

吾輩は少し考えた。長い旅だった。すぐには答えられない。

「選ぶこと、かな」

「なぜそう思う」

「みんな、何かを選んでいた。何を食べるか、何を買うか、何を作るか、税金をどう使うか。全部、選んでいた」

ご飯粒はうなずいた。

「それだけかな」

吾輩はもう少し考えて、付け加えた。

「支えることでもある。一人では生きられないから、協力する。働く。助け合う」

ご飯粒は珍しく、しんみりした様子でうなずいた。

「なかなか、いいことを言うようになったね」

「吾輩も成長したと言っただろう」

「それは認める。会社の経営能力以外はね」

「その一言は余計だ」

そこへ、ケンジの声が響いた。

「腹減った」

アカリが笑う。

「さっき給食食べたでしょ」

「育ち盛りだから」

「便利な言葉だね、それ」

吾輩も思わず笑ってしまった。どうやら中学生という生き物は、どれだけ経済を学んでも、腹は減るらしい。

ご飯粒が小さな声で言った。

「結局、そこが出発点なんだろうね」

「何が」

「人が生きること。食べること」

「急に格好いいことを言うな」

「たまにはね」

吾輩は窓の外を見た。校庭では生徒たちが走っている。教室では誰かが笑っている。どこにでもある中学校の一日だった。しかし今の吾輩には、それが少し違って見えた。

たくさんの人が支え合い、選び合い、つながり合って生きている。その真ん中に、ちゃっかり自分がいる。

「なあ、ご飯粒」

「何」

「吾輩は、この旅を通じて、少しは偉くなったと思うか」

「偉くはなってないけど、少し賢くはなったと思うよ」

「同じことだろう」

「全然違うと思うけど、まあいいや」

そして最後に、一つだけ言っておこう。

吾輩はカレーである。

今でも、揚げパンには負けたくないと思っている。

（終わり）